

□講義科目（基礎科目）

科目名	スポーツ共生社会特論	2 単位
担当者	藤田紀昭	
テーマ	国内外のスポーツ界に見られる格差、差別、不平等の実態について学び、それを乗り越えていくための方向性と手段について学修する。	
科目のねらい	<キーワード> ① 共生社会 ② 障害者 ③ 人種 ④ ジェンダー ⑤ 途上国 <内容の要約> 共生社会とは何かについて理解したうえで、現在、スポーツの現場においてみられる様々な格差、差別、不平等などの実態について学ぶ。具体的には障害者のスポーツの実態、スポーツにみられる人種差別の実態、スポーツにおけるジェンダー問題、先進国と途上国のスポーツに見られる格差である。さらにこれらの実態を乗り越えようとしている各種事例について知り、スポーツあるいは体育を通しての共生社会の実現の理論と方法を学修する。また、これらに関する最新の研究論文の講読を行う。 <学習目標> 1. 共生社会の在り方、社会的背景、歴史について説明することができる。 2. スポーツの現場においてみられる格差、差別、不平等などの実態について具体的な事例（障害、人種、ジェンダー、途上国）をあげて説明することができる。 3. スポーツの現場においてみられる格差、差別、不平等などを解消としている事例について説明し、そのための理論と方法について説明することができる。 4. スポーツを通しての共生社会形成についての研究成果をあげることができる。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 共生社会の在り方について（歴史、社会的背景、概念） 第 3 回 スポーツと障害者：格差、差別、不平等の実態 第 4 回 スポーツと障害者：共生社会への取り組み事例（インクルーシブ体育を含む） 第 5 回 スポーツと障害者：研究論文講読 第 6 回 スポーツと人種：格差、差別、不平等の実態 第 7 回 スポーツと人種：共生社会への取り組み事例 第 8 回 スポーツと人種：研究論文講読 第 9 回 スポーツとジェンダー：格差、差別、不平等の実態 第 10 回 スポーツとジェンダー：共生社会への取り組み事例 第 11 回 スポーツとジェンダー：研究論文講読 第 12 回 スポーツと途上国：格差、差別、不平等の実態 第 13 回 スポーツと途上国：共生社会への取り組み事例 第 14 回 スポーツと途上国：研究論文講読 第 15 回 本授業のまとめ	
事前学習の内容 学習上の注意	<事前> 授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間） <事後> 授業内容の復習をする。（1時間）	
本科目の 関連科目	スポーツ社会学特論、スポーツインテグリティ特論、スポーツ哲学特論	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	陣野俊史『サッカーと人種差別』文藝春秋。川島浩平『人種とスポーツ』中央公論。藤田紀昭『障害者スポーツの環境と可能性』創文企画。日本スポーツとジェンダー学会『データで見るスポーツとジェンダー』Megan Chawansky, Lyndsay Hayhurst 他『Innovations in 'Sport for Development and Peace' Research (ThirdWorlds)』Routledge	
成績評価方法 と基準	期末試験 70% 授業内レポート、課題 30% 100 点満点で 60 点以上を合格とする	

□講義科目（基礎科目）

科目名	スポーツインテグリティ特論	2単位
担当者	高尾尚平	
テーマ	スポーツ界における倫理的諸問題について、倫理的視点に基づき思考し、議論する	
科目のねらい	<キーワード> ① スポーツ ② 競技スポーツ ③ 応用倫理学 ④ インテグリティ ⑤ オーセンティシティ <内容の要約> 競技スポーツ界では倫理的に逸脱するような問題が度々指摘されるが、そのようなスポーツ界における倫理的諸問題について、なにがどのように問題であるのか、本当に問題であるのか、どのように解決策を見出せばよいのか、倫理的視点をもとに考察し、対話を通して議論を深めていく。また、スポーツのインテグリティを脅かそうとする問題について調べ、理解し、発表を通して適切な態度や指導方法を修得することがねらいである。 <学習目標> 1. 競技スポーツ界において指摘されている倫理的逸脱状況について理解できる。 2. 思考の枠組みとしての理学的視点を習得できる。 3. スポーツ界における倫理的諸問題について応用的に考え、議論できる。 4. スポーツのインテグリティを守るシステムについて理解し、説明することができる。	
授業の進め方	第1回 オリエンテーション 第2回 倫理学の体系について 第3回 応用倫理学としてのスポーツ倫理学 第4回 スポーツインテグリティとはなにか 第5回 倫理学的方法論（1）規範倫理学①功利主義 第6回 倫理学的方法論（2）規範倫理学②義務論 第7回 倫理学的方法論（3）規範倫理学③美德論 第8回 スポーツインテグリティについて考える（1）スポーツ指導と暴力の問題 第9回 スポーツインテグリティについて考える（2）スポーツジェンダーの問題 第10回 スポーツインテグリティについて考える（3）ドーピング禁止論 第11回 スポーツインテグリティについて考える（4）ドーピング容認論 第12回 スポーツインテグリティについて発表する（1）勝利至上主義について 第13回 スポーツインテグリティについて発表する（2）ドーピングについて 第14回 スポーツインテグリティについて発表する（3）スポーツ指導とコンプライアンスについて 第15回 総復習	
事前学習の内容 学習上の 注意	事前学習：第12回～第14回の部分の3つのうち、テーマをどれか一つ決めて資料を収集、熟読の上、発表資料を作成しておくこと（180分） 事後学習：倫理理論を枠組みにスポーツの諸問題について応用的に考える（90分） 能動的に授業に参画し、自ら考え、積極的に発言をすること	
本科目の 関連科目	スポーツ哲学特論	
テキスト	森岡正博、石井哲也、竹村瑞穂（2021）スポーツと遺伝子ドーピングを問う：技術の現在から倫理的問題まで。晃洋書房	
参考文献		
成績評価方法 と基準	論述試験 100%	

□講義科目（基礎科目）

科目名	障害者スポーツ実践特論	2 単位
担当者	三井利仁	
テーマ	各障害の特徴を理解し、スポーツを指導ができ、目標・効果を評価できるようになる	
科目のねらい	<キーワード> 障害論、指導法、トレーニング理論、マネジメント <内容の要約> スポーツ基本法の基本理念には、「障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」とある、本講義では、スポーツへのきっかけ、日常化について理解し、さらに強化方法と環境整備について具体的に理解する。また、ヒトがスポーツを継続するためにはヒトの環境に合わせた指導法について学ぶ。障害者スポーツ指導は状況の違うヒトへのスポーツ指導の基本であり、障がい者だけではなく、広くヒトを指導する基本となることができる。 <学習目標> 1. 研究を遂行する上で必要な基本的知識を理解し、活用できる。 2. 基本的な知識を基盤として、指導現場における課題を研究計画につなげることができる。 3. 既存の文献で得られた知見について、指導実践への具体的活用を説明できる。 4. 障害者スポーツ研究者としての基本的態度を身に付け、真摯な態度で研究を遂行することができる。	
授業の進め方	第 1 回 ガイダンス 第 2 回 我が国における障害者スポーツ政策について 第 3 回 タレント発掘事業の現状 第 4 回 アスリートパスウェイの基本構造 第 5 回 地域における障害者スポーツの普及の現状 第 6 回 障害児へのスポーツ導入のアプローチ（講師・オンライン） 第 7 回 海外の障害児へのスポーツ指導の事例（講師・オンライン） 第 8 回 車いす使用者の走動作の理解 第 9 回 脳原性麻痺者の走動作の理解 第 10 回 視覚障害者の走動作の理解 第 11 回 義肢装具に関すること 第 12 回 障害のある人のスポーツのきっかけ作り【院生】 第 13 回 障害のある人のスポーツの日常化について 1【院生】 第 14 回 障害のある人のスポーツの日常化について 2【院生】 第 15 回 口頭試問	
事前学習の内容 学習上の注意	履修上の注意 予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。 復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。 その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。	
本科目の 関連科目	スポーツ共生社会特論	
テキスト	随時、独自に制作された配布資料を用い、その中で参考書などを紹介する。	
参考文献	1. アダプテッド・スポーツの科学―障害者・高齢者のスポーツ実践のための理論(矢部 京之助, 草野勝彦他) 2. リハビリテーション医学・医療コアテキスト 日本リハビリテーション医学会（著） 3. 障がい者スポーツ指導教本―初級・中級 日本障がい者スポーツ協会	
成績評価方法 と基準	1. 平常点は、授業中のプレゼンテーション、さらに予習・復習で行われるノートの整理、グループワーク課題の記載を 30 点 2. さらに、授業中の各種グループワークへの取り組みの態度を 20 点 3. 定期試験による出題への知識・理解、さらに研究的思考力を 50 点 4. 3 つの合計 100 点中 60 点で合格点とする。	

□講義科目（基礎科目）

科目名	発育発達学特論	2 単位
担当者	吉岡隆之	
テーマ	健常者および障がい者の枠を超えて発育発達現象の評価法を確立し、スポーツ実践の適時性について考究する。	
科目のねらい	<キーワード> ①発育発達学研究の方法 ②発育発達現象の評価法 ③障がい者スポーツと発達 <内容の要約> 発育発達学は、乳幼児期、学童期、青年期および老年期にわたる発育発達に関する課題を明らかにし、それらを解決し、すべての人々の健康の保持増進に寄与するための科学である。日本人の身長最大の発育年齢は戦後急速に若年化したが、近年その傾向は緩やかになり、定常状態となっている。最大発育年齢が若くなるということは、思春期が早く訪れることを意味している。この体の発育に対してここをはじめとした発達が同時進行すれば問題はないが、必ずしもそうではないようである。そこで発育発達に関する現代的課題を明らかにし、課題解決に向けた手法について疫学的アプローチを基に新たに学修する。 <学習目標> 1. 発育発達という現象が、どのような条件や要因によって規定され、また影響されるのかについて体系的にとらえ、発育発達に関する現代的課題を明らかにすることができる。 2. 人生 90 年時代を迎える中で、すべての人々が生きがいを持って生活できる共生社会を実現するために発育発達学の立場から寄与できる。 3. 過度のスポーツ実践は、取り返しのつかない身体的、精神的な負担を伴うことにも十分配慮し、スポーツ実践の適時性についても常に配慮することができる。 4. 乳幼児期、学童期および青年期の身体発達を主に扱うが、子ども達の発育発達に関する課題解決が、健常者および障がい者の枠を超えた普遍的なスポーツ実践につなげることができる。	
授業の進め方	第 1 回 現代の子ども達の健康課題と発育発達 第 2 回 身体発育の概観 第 3 回 身体発達の課題（疾病との関わり） 第 4 回 身体発達の特徴（生涯保健との関わり） 第 5 回 健常児および障害児の運動能力の発達と加齢変化 第 6 回 エネルギー代謝の加齢変化 第 7 回 筋力の発達とトレーニング効果 第 8 回 持久力の発達とトレーニング効果 第 9 回 調整力および柔軟性とトレーニング効果 第 10 回 障がい児の運動能力の発達と加齢変化 第 11 回 障がい者のトレーニング効果 第 12 回 身長の最大発育年齢の年次推移 第 13 回 思春期の健康とオーバートレーニング 第 14 回 個々の成熟度に応じた発育発達現象の評価 第 15 回 発育発達研究とスポーツ科学との関わり	
事前学習の内容 学習上の注意	履修上の注意 予習：発育発達現象に関わる課題について、あらかじめ学習しておくこと。調べたことについて 30 分程度のプレゼンテーションができるよう準備しておくこと。 復習：授業で得られた知見や疫学的アプローチを他分野でも生かせるようにすること。	
本科目の 関連科目	身体運動学特論、スポーツ医学特論、スポーツ心理学特論、スポーツ共生社会特論	
テキスト	樋口満、佐竹隆著、高石昌弘（監修）からだの発達と加齢の科学、大修館、2012	
参考文献	J. M. Tanner 著、林 正（監訳）「成長のしくみをとく - 胎児期から成人期までの成長のすずみ方 -」、東山書房、1994 竹内義博、大矢紀昭「よくわかる子どもの保健」第 3 版、ミネルヴァ書房、2016	
成績評価方法 と基準	毎回の授業の際の発表（30%）、文献購読の達成度（30%）およびデータの分析及び考察（40%）で評価し、総合評価 60% 以上を合格とする。	

□講義科目（専門科目）

科目名	身体運動学特論	2 単位
担当者	松田有司	
テーマ	身体運動の仕組みとその分析方法に関する理解を深める。	
科目のねらい	<キーワード> ①身体運動 ②バイオメカニクス ③運動制御 <内容の要約> 身体運動を深く理解するためには力学をはじめとする（狭義の）バイオメカニクスの習得とともに、骨格筋制御の礎である神経系の構造と機能についても十分に習得することが肝要である。そこで本科目では、バイオメカニクスおよび運動制御の視点から、身体運動の仕組みについてより専門的な理解を図るために、両視点での最新の研究知見を含めたレビューを行う。また、バイオメカニクスと運動制御の分析方法についての研究知見のレビューを行うことに加え、モーションキャプチャー、床反力計、および筋電計などを使用して測定し、研究方法について体験的に学習する。本科目で紹介する身体運動研究の知見が、日常生活やスポーツの実践の場でどのように応用され得るか検討を行う。 <学習目標> 1. バイオメカニクスおよび神経科学の研究知見を基に、身体運動の仕組みや分析方法を専門的に理解することができる。 2. 日常生活やスポーツ実践の場に対して、身体運動研究の知見を具体的に応用するための方策を考案することができる。	
授業の進め方	第 1 回 身体運動に関する概説 第 2 回 身体の構造と機能（バイオメカニクス研究のレビュー） 第 3 回 身体の構造と機能（運動制御研究のレビュー） 第 4 回 身体運動の仕組みに関するバイオメカニクス研究のレビュー（日常生活） 第 5 回 身体運動の仕組みに関する神経科学研究のレビュー（日常生活） 第 6 回 日常生活の質的向上に対する身体運動研究の知見応用の検討 第 7 回 バイオメカニクス研究手法① 2次元分析 第 8 回 バイオメカニクス研究手法② 3次元分析 第 9 回 バイオメカニクス研究手法③ キネティクス分析 第 10 回 運動制御研究手法① Coordination 分析 第 11 回 運動制御研究手法② 筋電図分析 第 12 回 運動制御研究手法③ 歩行・姿勢制御 第 13 回 身体運動の測定に関わる神経科学的手法のレビュー 第 14 回 身体運動研究における各種手法の応用の検討 第 15 回 身体運動研究の展望に関する全体討議	
事前学習の内容 学習上の注意	当該内容について、下記の参考文献などを熟読して授業に臨むこと。 当該内容について、講義とともにディスカッションを行いながら授業展開する。 授業内容に関する疑問が生じた場合は、積極的に質問をすること。	
本科目の 関連科目	スポーツ心理学特論、スポーツコーチング演習 A	
テキスト	特に指定しない。	
参考文献	① R.M. エノーカ『ニューロメカニクスー身体運動の科学的基盤ー』西村書店（2017） ② D.A. ウィンター『バイオメカニクスー人体運動の力学と制御ー』ラウンドフラット（2011）	
成績評価方法 と基準	数回の課題レポートにより評価し、総合評価 60 点以上を合格とする。	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツコーチング特論	2 単位
担当者	三井利仁	
テーマ	指導者は選手の競技力を向上させ、成果を上げさせることにある。選手を育成・強化するコーチング能力、コミュニケーション能力を身につける。	
科目のねらい	<キーワード> ① 競技力向上 ② 人間力 ③ 方法論 <内容の要約> コーチングはヒトの能力を向上させる手段であり、この講義では、あらゆるヒトの運動能力をいかに計画的、効率的に向上させていくかを取り上げていく。本特論ではトップアスリートだけではなく広く、コーチングを活かせる知識について理解する。特に構成要素の中でも情報、計画立案について応用的に考える。 <学習目標> 1. ヒトがスポーツ機範に基づき、主体的、継続的にスポーツを楽しむ事を理解することができる。 2. 単に競技力向上だけではなく、指導者として正しいコミュニケーションのとり方、情報利用の方法について理解することができる。 3. 年齢、体力、技術、環境に応じて、快適にスポーツを享受できるように、スポーツとの関わりを主体的にコーディネートする資質や能力を広く学び、競技者が人間力向上の上に競技力が向上することの重要性を理解することができる。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 コーチングとテーチングについて 第 3 回 スポーツコーチングの在り方 第 4 回 競技力の構成要素について 第 5 回 リスクマネジメント 第 6 回 障害児へのスポーツ指導（講師・オンライン） 第 7 回 海外の事例報告 第 8 回 スポーツと情報活用について（ICT） 第 9 回 PDCA サイクルについて 第 10 回 パラアスリートによる講話（講師・オンライン） 第 11 回 スポーツと情報活用について 第 12 回 スポーツと情報活用について 第 13 回 アナリストデータの活用 第 14 回 スポーツコーチングの方法 エビデンス評価 第 15 回 口頭試問	
事前学習の内容 学習上の注意	履修上の注意 予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。 復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。 その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。	
本科目の 関連科目	スポーツ共生社会特論、スポーツ心理学特論、実践トレーニング特論	
テキスト	随時、独自に制作された配布資料を用い、その中で参考書などを紹介する。	
参考文献	1. Coaching: Coaching Strategies: The Top 100 Best Ways To Be A Great Coach (Sports Coaching Strategies for Conditioning (Ace McCloud : 編) 2. 図解 コーチングマネジメント 人と組織のハイパフォーマンスをつくる (伊藤守 : 編) 3. 伸びる人のデータの読み方、強い組織のデータの使い方—全日本女子バレーボールチーム・アナリストが教える情報戦略 (渡辺 啓太 : 編)	
成績評価方法 と基準	1. 平常点は、授業中のプレゼンテーション、さらに予習・復習で行われるノートの整理、グループワーク課題の記載を 30 点 2. さらに、授業中の各種グループワークへの取り組みの態度を 20 点 3. 定期試験による出題への知識・理解、さらに研究的思考力を 50 点 4. 3 つの合計 100 点中 60 点で合格点とする。	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツ心理学特論	2 単位
担当者	山本真史	
テーマ	スポーツのこころと身体つながり	
科目のねらい	<キーワード> ① 運動の制御と学習 ② 知覚・認知 ③ 心理サポート ④ パラスポーツ <内容の要約> スポーツにおける心理学的諸問題に関する最新の知見・事例を概観することにより、当該領域の動向に関する理解を深める。主に、次の4つのテーマに焦点を当てて講義を展開し、スポーツにおけるこころと身体つながりについての理解を深める。 1) 運動制御と運動学習の理論の理解とその効果的な応用の検討 2) 知覚・認知に関する理論の理解とその応用の検討 3) アスリートや指導者に対する心理サポートの理論と技法の理解、その効果と評価の検討 4) パラアスリートの心理的変容プロセスに関する理論の理解と事例の検討 ここで扱う理論と技法は、学校体育やパラスポーツの指導に援用可能であり、それらに関する文献や事例についても検討する。 <学習目標> スポーツ心理学の理論とその指導現場での活用を学修し、心身のつながりについての理解を深める。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 運動制御に関する諸理論のレビュー 第 3 回 運動制御に関する応用と課題の検討 第 4 回 運動学習に関する諸理論のレビュー 第 5 回 運動学習に関する応用と課題の検討 第 6 回 運動制御・運動学習研究における最新知見の検討（ゲスト講義） 第 7 回 知覚・認知に関する諸理論のレビュー 第 8 回 知覚・認知に関する応用と課題の検討 第 9 回 運動制御・学習・知覚・認知における諸問題に関する全体討議 第 10 回 心理サポートに関する諸理論と技法のレビュー 第 11 回 心理サポートに関する効果と評価の検討 第 12 回 心理サポートの最新動向（ゲスト講義） 第 13 回 パラアスリートの心理的変容プロセスに関する諸理論のレビュー 第 14 回 パラアスリートの心理的変容プロセスに関する事例の検討 第 15 回 心理サポート・パラアスリートの心理的変容プロセスに関する全体討議	
事前学習の内容 学習上の注意	シラバスに基づき、講義内容についての予習を行い講義に臨むこと。 各テーマについて、講義とプレゼンテーションを交えて授業を行う。	
本科目の 関連科目	スポーツメンタルトレーニング特論、身体運動学特論、スポーツコーチング演習 A	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	荒木雅信・山本真史（編著）「これから学ぶスポーツ心理学 三訂版」大修館書店（2023） ※ 洋書については適宜授業内で紹介する。	
成績評価方法 と基準	授業におけるプレゼンテーション（30%）、テーマ毎の課題レポート（70%）により総合的に評価し、60 点以上を合格とする。	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツメンタルトレーニング特論	2 単位
担当者	山本真史	
テーマ	心理サポートと競技者の人格形成と自立	
科目のねらい	<キーワード> ① 心理サポート ② スポーツメンタルトレーニング ③ スポーツカウンセリング ④ 人格形成 ⑤ 心理的成長 <内容の要約> 競技者への心理サポートの理論と技法およびその評価法に関する最新の知見と事例を通してその動向についての理解を深める。特に次の4つのテーマに焦点を当てて講義を展開する。 1) アスリートやチームに対して行うスポーツメンタルトレーニングやスポーツカウンセリングなど心理サポートの理論と技法の理解 2) アスリートやチームに対する心理サポートの効果およびアスリートの心理状態の評価 3) アスリートの人格形成や心理的成長に関する理論の理解と事例の検討 4) 心理サポートと他専門領域サポートの効果的な連携と立ち位置の検討 ここで扱う理論と技法は、効果的な指導やアスリート・指導者のデュアルキャリア、またパラスポーツの指導にも関係するため、それらに関する文献や事例についても検討する。 <学習目標> 心理サポートにおけるスポーツメンタルトレーニングの理論と活用法についての理解を深め、カウンセリングマインドの醸成を図ることができる。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 スポーツメンタルトレーニングの理論と技法の理解①（自己評価法） 第 3 回 スポーツメンタルトレーニングの理論と技法の理解②（目標設定法） 第 4 回 スポーツメンタルトレーニング実践の実際（契約、心理支援者の役割と倫理） 第 5 回 スポーツカウンセリングの理論と技法の理解①（運動イメージ） 第 6 回 スポーツカウンセリングの理論と技法の理解②（投影法） 第 7 回 スポーツカウンセリングの事例の検討（ゲスト講義） 第 8 回 スポーツメンタルトレーニング・カウンセリングの最新知見の検討 第 9 回 心理サポートの効果とアスリートの心理状態評価法①（バイオフィードバック） 第 10 回 心理サポートの効果とアスリートの心理状態評価法②（語り、ライフライン） 第 11 回 心理サポートの効果とアスリートの心理状態評価法についての事例の検討 第 12 回 心理サポートと他専門領域サポートの効果的な連携と立ち位置の検討 第 13 回 アスリートの人格形成や心理的成長に関する理論の理解 第 14 回 アスリートの人格形成や心理的成長に関する事例の検討（ゲスト講義） 第 15 回 心理サポートに関する諸問題に関する全体討議	
事前学習の内容 学習上の注意	シラバスに基づき、講義内容についての予習を行い講義に臨むこと。提示した各テーマについて、講義とプレゼンテーションを交えて授業を行う。	
本科目の 関連科目	スポーツ心理学特論、身体運動学特論、スポーツコーチング演習 A	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	日本スポーツ心理学会（編）「スポーツメンタルトレーニング教本（三訂版）」大修館書店（2016） 荒木雅信・山本真史（編著）「これから学ぶスポーツ心理学 三訂版」大修館書店（2023） ※ 洋書については適宜授業内で紹介する。	

成績評価方法 と基準	授業におけるプレゼンテーション（30%）、テーマ毎の課題レポート（70%）により総合的に 評価し、60 点以上を合格とする。
---------------	---

□講義科目（専門科目）

科目名	実践トレーニング特論	2 単位
担当者	石村和博	
テーマ	トレーニングの客観化と力学的エビデンスに基づく実践知の構築	
科目のねらい	<キーワード> ① VBT ② 爆発的パワー発揮 ③ 高強度インターバルトレーニング ④ 女性アスリートのトレーニング ⑤ パラアスリートのトレーニング <内容の要約> トレーニング中の動作を力学的にモデル化することから始め、VBT やフォースプレート等の機器を用いてトレーニング中の現象を客観的に分析・評価する手法を学ぶ。後半では、女性アスリートやパラアスリートといった対象の個別性に焦点を当て、それまでの実習で得た知識と最新の知見に基づき、個別要因を考慮した最適なアプローチについて多角的に考察する。 <学習目標> 1.力学的理解：トレーニング中の動作をモデル化し、身体にかかる力学的負荷の仕組みを説明できる 2.計測と分析：各種測定機器から得られたデータを適切に分析・評価できる 3.個別適応：対象者の個別性と学術的知見に基づき、論理的なアプローチを導き出すことができる	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 レジスタンストレーニングの力学（1）：静的負荷の可視化 第 3 回 レジスタンストレーニングの力学（2）：動的負荷と挙上速度 第 4 回 VBT（Velocity Based Training）の科学的基礎 第 5 回 VBT の実践：カー速度プロファイルの作成 第 6 回 VBT に関する文献抄読と検討 第 7 回 爆発的パワー発揮の科学的基礎 第 8 回 爆発的パワー発揮の実践 第 9 回 爆発的パワー発揮に関する文献抄読と検討 第 10 回 スタミナの科学的基礎：ロー・ミドル・ハイパワー 第 11 回 高強度インターバルトレーニングの実践 第 12 回 高強度インターバルトレーニングに関する文献抄読と検討 第 13 回 トレーニングの個別性（1）：女性アスリートのトレーニング 第 14 回 トレーニングの個別性（2）：パラアスリートのトレーニング 第 15 回 まとめ（成果発表）	
事前学習の内容 学習上の注意	履修上の注意 予習：参考書や文献などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。 復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。 その他：測定時には身体運動を伴う。授業には積極的な姿勢で参加すること。	
本科目の 関連科目	スポーツ心理学特論、スポーツコーチング特論、スポーツコーチング演習 A、スポーツコーチング演習 B、身体運動学特論	
テキスト	なし	
参考文献	Mark Rippetoe 著、八百健吾 監訳『スターティング・ストレングス [第 3 版] — Basic Barbell Training』市ヶ谷出版社 J.C.ラドクリフ、R.C.ファレンティノス 著、小河原慶太、金子公宥 訳『爆発的パワー養成 プライオメトリクス』大修館書店 日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター 編『フィットネスチェックハンドブック -体力測定に基づいたアスリートへの科学的支援-』大修館書店 その他は、授業時に適宜紹介する。	

成績評価方法 と基準	1.測定・分析法への理解（30%） 2.文献抄読（30%） 3.最終成果発表（40%）
---------------	---

□講義科目（専門科目）

科目名	環境生理学特論	2 単位
担当者	西村直記	
テーマ	種々環境下でのスポーツ時の生理機能変化を理解するとともに、指導者として活用できる実践力を養う	
科目のねらい	<キーワード> ① スポーツと環境 ② 高地トレーニング ③ 暑熱・寒冷環境 ④ 体温調節機能 ⑤ 熱中症 <内容の要約> ヒトは様々な環境変化に応じて生理機能を変化させ、生体のホメオスタシスを維持している。本講義では、特にスポーツ時のパフォーマンスと密接に関わり合う高地環境および暑熱・寒冷環境に関する最新の研究内容を取り上げ、アスリートならびに一般人がこれらの環境下でスポーツを実施した際の生理機能の変化について学修するとともに、指導者として活用できる実践力を養う。 <学習目標> 1. 高地環境下でのスポーツ時の生体反応について理解し、説明することができる。 2. 暑熱・寒冷環境下でのスポーツ時の生体反応について理解し、説明することができる。 3. 体温調節機能とパフォーマンスとの関係について理解し、説明することができる。 4. 熱中症とその予防対策について理解し、説明することができる。	
授業の進め方	第 1 回 スポーツと環境 第 2 回 高地環境下での生理機能変化 第 3 回 高地トレーニングの理論と実際 第 4 回 グループディスカッション（高地トレーニング） 第 5 回 自律性体温調節と行動性体温調節 第 6 回 寒冷環境下での生理機能変化 第 7 回 暑熱環境下での生理機能変化 第 8 回 寒冷・暑熱環境とパフォーマンス 第 9 回 短期暑熱順化と長期暑熱順化 第 10 回 グループディスカッション（寒冷・暑熱環境とパフォーマンス） 第 11 回 熱中症の病型と症状 第 12 回 熱中症予防対策 1：水分摂取 第 13 回 熱中症予防対策 2：身体冷却 第 14 回 グループディスカッション（熱中症対策） 第 15 回 微小重力環境下での生理機能変化	
事前学習の内容 学習上の注意	<事前> 予め次回の講義内容について、スポーツ生理学や生理学の参考書や論文などを用いて予習し、疑問点などを明確にして講義に臨む。 <事後> 講義内容の理解を更に深めると共に、不明確な内容については再度自己学習する。	
本科目の 関連科目	スポーツ医学特論、身体運動学特論、実践トレーニング特論、障害者スポーツ実践特論	
テキスト	未定	
参考文献	Hall JE（著）石川義弘（監訳）：『ガイドン生理学』 ELSEVIER McArdle WD：『Physiology: Nutrition, Energy, and Human Performance』 Wolters Kluwer	
成績評価方法 と基準	1. 講義毎のレポート提出（30%） 2. 論述試験（70%）	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツ医学特論	2 単位
担当者	柿崎裕彦	
テーマ	スポーツ科学を専攻するにあたって知っておくべき医学的知識の習得	
科目のねらい	<キーワード> ① スポーツ医学(外科系) ② スポーツ医学(内科系) ③ スポーツ栄養学 ④ スポーツと視覚 <内容の要約> スポーツ科学を専攻する者は、将来的には指導者として自立することが期待される。選手を指導するにあたって、選手各々の体調やその変化を把握し、外傷が生じた時の応急処置を理解・実践できることは、指導者として必須である。また、スポーツにおける視覚の関与を理解し、視覚がどのように運動パフォーマンスに結びついているのか理解する。 <学習目標> 1. スポーツ障害について理解し、説明することができる。 2. 熱中症について理解し、説明することができる。 3. よりよく運動するための栄養学を理解し、説明することができる。 4. スポーツにおける視覚の関与を理解し、説明することができる。	
授業の進め方	第 1 回 人体解剖学・骨格系 第 2 回 人体解剖学・筋1（上肢・肩・体幹前面） 第 3 回 人体解剖学・筋2（下肢・股関節・体幹後面） 第 4 回 人体解剖学・神経系・循環系 第 5 回 人体解剖学・呼吸器系・内臓系・泌尿器系 第 6 回 人体解剖学・眼科系 第 7 回 スポーツ医学(外科系1：頭部・顔面・脊椎の外傷) 第 8 回 スポーツ医学(外科系2：上肢・肩の外傷) 第 9 回 スポーツ医学(外科系3：下肢・股関節の外傷) 第 10 回 スポーツ医学(内科系1：内科系疾患とスポーツ) 第 11 回 スポーツ医学(内科系2：熱中症) 第 12 回 スポーツ医学(女性、成長期、高齢者、障害者) 第 13 回 スポーツ栄養学（アミノ酸プールとしての筋と免疫系との関連） 第 14 回 スポーツ医学と視覚 第 15 回 総括	
事前学習の内容 学習上の 注意	<事前> スポーツ医学の参考書・文献等を用いて予習し、疑問点を明らかにしておく。 <事後> 講義内容の理解を更に深めるため、不明確な内容に関しては、教員への質問や文献の検索等によって速やかに解決する。	
本科目の 関連科目	環境生理学特論、スポーツ理学療法学特論	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	・スポーツ医学検定 公式テキスト（2・3級）一般社団法人日本スポーツ医学検定機構 ・基礎から学ぶ！スポーツ栄養学（基礎から学ぶ！スポーツシリーズ）鈴木 志保子 ・スポーツ眼科 A to Z（MB OCULISTA（オクリスタ））枝川 宏 ・分担解剖学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	
成績評価方法 と基準	1. 講義毎のレポート提出（50%） 2. 筆記試験（50%）	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツ哲学特論	2 単位
担当者	高尾尚平	
テーマ	スポーツとは何かという問いについて、哲学的思考をもとに自ら考える	
科目のねらい	<キーワード> ① スポーツ ② 競技スポーツ ③ 本質 ④ 性質 ⑤ 分析哲学 ⑥ 大陸合理論 ⑦ 身体教育 <内容の要約> スポーツ哲学とは、スポーツとは何かという問いについて迫る学問分野である。換言すれば、スポーツの本質とは何かに迫ることがねらいである。しかし、その前提として、スポーツの本質とはなにか、という問いそのものに対する哲学的探究が求められる。そもそもスポーツに本質があるのかどうか、問いの設定の妥当性も含めて学習し、スポーツのエトス（内在的目的）や価値について理解を深める。そのために、英語論文を中心に、分析スポーツ哲学、大陸スポーツ哲学の文献を精読していく中で、上述したスポーツ哲学の考察対象について理解を深めるとともに、議論を展開していく。 <学習目標> 1. スポーツの定義について考えることが出来る。 2. スポーツの本質論・非本質論の立場について、哲学的視点から理解出来る。 3. 海外の文献を中心に、スポーツ哲学の方法論について理解できる。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 スポーツ哲学史について 第 3 回 英語論文の精読 1 第 4 回 英語論文の精読 2 第 5 回 英語論文の精読 3 第 6 回 英語論文の精読 4 第 7 回 英語論文の精読 5 第 8 回 英語論文の精読 6 第 9 回 英語論文の精読 7 第 10 回 英語論文の精読 8 第 11 回 中間確認テスト 第 12 回 スポーツに関する応用哲学（1）競争の哲学 第 13 回 スポーツに関する応用哲学（2）オリンピックの哲学 第 14 回 スポーツに関する応用哲学（3）パラリンピックの哲学 第 15 回 スポーツに関する応用哲学（4）身体の哲学	
事前学習の内容 学習上の 注意	事前学習：指定した英語論文の予習を行ってこること（240分） 事後学習：学習内容の定着を図る（60分） 適宜支持する予習を行い、能動的に授業に参画し、自ら考え、積極的に発言をすること	
本科目の 関連科目	スポーツインテグリティ特論	
テキスト	Cesar R.Torres (ed) The Bloomsbury companion to the Philosophy of sport. Bloomsbury.	
参考文献	友添秀則・岡出美則編著（2016）新版 教養としての体育原理. 大修館書店.	
成績評価方法 と基準	論述試験 100%	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツ史特論	2 単位
担当者	新井博	
テーマ	近代スポーツの誕生	
科目のねらい	<キーワード> ① 近代スポーツ ② 産業革命 ③ イギリス ④ アメリカ ⑤ 日本 <内容の要約> 中世末のイギリスでは、地方の大土地所有者であるジェントリーたちが、フィールドスポーツと言われる狩や釣りなどのスポーツに興じていた。18 世紀イギリスに起こった産業革命により、囲い込みにより農村部から都市部に移動した労働者たちが工場労働者となり、ヒマと金をもった新興ブルジョアジーが誕生し、ゴルフ、クリケット、ボートなどのスポーツに興じるようになった。それらが具体的な適用について検討する。 <学習目標> 1. イギリスのスポーツに興じる人々についての理解を深めることができる。 2. 他に、アメリカ、日本の様子をとらえることができる。 3. スポーツの誕生について歴史的背景、理論構造に関して知識を修得することができる。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 中世の社会とスポーツ 第 3 回 中世のイギリスでのスポーツ 第 4 回 18 世産業革命とスポーツの誕生 第 5 回 19 世紀のパブリックスクールでのスポーツの誕生 第 6 回 1863 年フットボール連盟の誕生 第 7 回 1871 年ラグビー連盟の誕生 第 8 回 1880 年以降のフットボールのプロ化 第 9 回 各スポーツの組織化 第 10 回 各スポーツの国際的な組織化 第 11 回 アメリカでのスポーツの誕生 第 12 回 アメリカでのスポーツの普及 第 13 回 日本でのスポーツの導入と普及 第 14 回 日本でのスポーツの発展 第 15 回 まとめ	
事前学習の内容 学習上の 注意	シラバスに基づき、講義内容に関する予習を行い講義に臨むこと。提示したテーマについて、講義とプレゼンテーションを交えながら展開する。	
本科目の 関連科目	なし	
テキスト	スポーツの歴史と文化	
参考文献	なし	
成績評価方法 と基準	プレゼンテーション 20%、事前課題レポート 30%、最終レポート 50%により総合評価し、60 点以上を合格とする。	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツ社会学特論	2 単位
担当者	藤田紀昭	
テーマ	スポーツ界の様々な事象をスポーツ社会学の理論を手掛かりに読み解く	
科目のねらい	<キーワード> ① プレイ論 ② スポーツ文化論 ③ スポーツ近代化論 ④ 共生社会論 ⑤ スポーツ指導者論 ⑥ オリンピズム <内容の要約> 本授業ではスポーツ界に生じている様々な事象をスポーツ社会学分野において蓄積されてきた各種理論を用いて整理し、その要因を明らかにし、課題解決に向けての手がかりを得られるようにする。また、個々人が関心のあるテーマについて社会学的に考察し、発表を行う。 <学習目標> 1. スポーツ社会学で用いられている各種理論を理解し、説明することができる。 2. スポーツ界で生じている事象について適切な理論を用いて説明、発表することができる	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 スポーツ文化論とプレイ論 第 3 回 スポーツ近代化論と大相撲 第 4 回 共生社会論と障害者スポーツ 第 5 回 子どもの遊びとスポーツ 第 6 回 スポーツ指導者論と体罰問題 第 7 回 スポーツ指導者論：事例研究 第 8 回 オリンピズムと現代のオリンピック 第 9 回 スポーツの歴史とルールの変化 論文講読の準備 第 10 回 スポーツ社会学論文講読① 第 11 回 スポーツ社会学論文講読② 第 12 回 スポーツにおける諸課題の背景と要因の探求① 第 13 回 スポーツにおける諸課題の背景と要因の探求② 第 14 回 スポーツにおける諸課題の背景と要因および解決策の発表と議論① 第 15 回 スポーツにおける諸課題の背景と要因および解決策の発表と議論②	
事前学習の内容 学習上の 注意	<事前> 授業の終了時に次回の内容を説明するので、その内容に沿って予習をする。（1時間） <事後> 授業内容の復習をする。（1時間）	
本科目の 関連科目	スポーツ史特論、スポーツ人類学特論、スポーツ哲学特論、スポーツ共生社会特論	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	井上俊・菊幸一編、2012、『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房 佐伯年詩雄監修・菊幸一、仲澤真編集、2006、『スポーツプロモーション論』明和出版 スポーツ社会学会、2013『21 世紀のスポーツ社会学』創文企画	
成績評価方法 と基準	期末試験 50% 授業内レポート、課題 50% 100 点満点で 60 点以上を合格とする	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツビジネス特論	2 単位
担当者	住田健	
テーマ	スポーツビジネスに関する諸問題を、マーケティングの理論を用いて解決するための手法を学修する	
科目のねらい	<キーワード> ① スポーツビジネス ② スポーツマーケティング ③ スポーツ消費者 ④ スポーツマーケティング戦略 ⑤ スポーツマーケティングリサーチ <内容の要約> 現代のスポーツビジネスは、グローバル化、テクノロジーの進化に影響を受け急速に成長している産業である。そのような中、消費者のスポーツに対するニーズは多様化し、スポーツ事業に関わる現象も複雑になってきている。本特論では、現代のスポーツビジネスの課題をマーケティングの理論・手法を理解し、援用することで解決するための手法を身につけることを目的とする。 <学習目標> 1. 現代のスポーツビジネスの現状と課題について理解し、解決するための仮説を設定することができる。 2. スポーツマーケティング理論、重要なトピックについて理解し、説明することができる。 3. スポーツビジネスの課題を解決するために必要なリサーチ手法について理解し、説明することができる。 4. リサーチから得られた結果をもとに、マーケティングプランを立案することができる。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 スポーツビジネス概要：スポーツビジネスの現状と課題の理解 第 3 回 スポーツマーケティングの基礎理論①：マーケティングとはなにか 第 4 回 スポーツマーケティングの基礎理論②：一般財とサービス財の違い 第 5 回 スポーツマーケティングの基礎理論③：スポーツプロダクトの特性 第 6 回 スポーツ消費者行動の基礎理論①：スポーツ消費者の動機と価値判断 第 7 回 スポーツ消費者行動の基礎理論②：スポーツ消費者の情報接触、注意、知覚 第 8 回 スポーツ消費者行動の基礎理論③：スポーツ消費者の意思決定プロセス 第 9 回 スポーツ消費者行動の基礎理論④：スポーツ消費者のサービス評価と満足度 第 10 回 スポーツマーケティングの戦略①：マーケット・セグメンテーション 第 11 回 スポーツマーケティングの戦略②：代替品とポジショニング 第 12 回 スポーツマーケティングの戦略③：マーケティング戦略プラン 第 13 回 スポーツマーケティングリサーチ①：仮説構築と検証の手続き 第 14 回 スポーツマーケティングリサーチ②：調査用紙作成のための基礎知識 第 15 回 スポーツマーケティングリサーチ③：調査用紙作成の実践	
事前学習の内容 学習上の注意	事前学習：各単元の前週に文献資料を配布するので、読んでおくこと（60分） 事後学習：講義で配布する資料と文献資料を読み返し単元の理解に努めること（90分） スポーツビジネス業界は日々発展するため、国内外のスポーツビジネスの動向やスポーツ産業の情報を常に集めておくこと	
本科目の 関連科目	スポーツマネジメント特論	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	平田竹男（2017）スポーツビジネス最強の教科書（第2版）. 東洋経済. 森岡毅・今西聖貴（2016）確率志向の戦略論. 角川書店. 川上昌直（2013）儲ける仕組みをつくるフレームワークの教科書. かんき出版. 原田宗彦・藤本淳也・松岡宏高（2018）スポーツマーケティング（改訂版）. 大修館書店.	
成績評価方法 と基準	スポーツ組織が抱える課題を解決するための企画書を作成し、提出をしてもらう。企画書は、課題の要因に関する仮説設定パート（25 点）、仮説を検証するための質問用紙（25 点）、想定される結果から策定されるマーケティングプラン（50 点）の三部構成で評価を行う。 企画書全体を 100 点とし、60 点以上を合格とする	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツマネジメント特論	2 単位
担当者	住田健	
テーマ	スポーツ組織が抱える課題を解決するための思考とその実践手法を学修する	
科目のねらい	<キーワード> ① マネジメント ② 市場環境 ③ スポーツ組織 ④ スポーツファイナンス ⑤ スポーツ法 <内容の要約> 簡潔に言えば、スポーツマネジメントとは、スポーツ組織が持つヒト・モノ・カネ・情報の経営資源を効率的に活用し、スポーツの付加価値を生み出す作業のプロセスである。そのため、スポーツマネジメントが対処とする組織の範囲は、地域の市民クラブから世界を代表するプロスポーツクラブにまで渡る。本特論では、現代のスポーツ組織が抱える課題を、市場環境と組織のマネジメントの観点から学修する。また、スポーツマネジメントを深く理解するために、スポーツマネジメントに必要な財務知識と法知識についても取り上げる。 <学習目標> 1. 現代のスポーツマネジメントの現状と課題について理解し、説明することができる。 2. スポーツマネジメントにおける重要な理論・概念について理解し、説明することができる。 3. 実践現場の課題を解決するための手法を生み出すために、スポーツマネジメントの学術的知見を還元することができる。	
授業の進め方	第 1 回 オリエンテーション 第 2 回 スポーツマネジメント概要：スポーツマネジメントの現状と課題の理解 第 3 回 スポーツマネジメントの市場環境①：スポーツ組織の競争戦略 第 4 回 スポーツマネジメントの市場環境②：スポーツ組織の差別化戦略 第 5 回 スポーツマネジメントの市場環境③：市場における競争優位 第 6 回 スポーツマネジメントの市場環境④：多角化と事業ポートフォリオ 第 7 回 スポーツ組織のマネジメント①：スポーツ組織と人的資源 第 8 回 スポーツ組織のマネジメント②：スポーツ組織の構造 第 9 回 スポーツ組織のマネジメント③：スポーツ組織計画と管理 第 10 回 スポーツ組織のマネジメント④：スポーツ組織に求められるリーダーシップ 第 11 回 スポーツ組織のマネジメント⑤：スポーツ組織の理念と組織文化 第 12 回 スポーツ組織のファイナンス①：スポーツファイナンスの特性 第 13 回 スポーツ組織のファイナンス②：ファイナンス思考によるスポーツマネジメント 第 14 回 スポーツマネジメントの法知識①：スポーツ組織の設立と関連する法律 第 15 回 スポーツマネジメントの法知識②：スポーツビジネスと関連する法律	
事前学習の内容 学習上の 注意	事前学習：各単元の前週に文献資料を配布するので、読んでおくこと（60分） 事後学習：講義で配布する資料と文献資料を読み返し単元の理解に努めること（90分） スポーツマネジメントを深く理解するために、スポーツマネジメントに関する文献だけではなく、一般の経営学に関する文献も積極的に読むことを推奨する	
本科目の 関連科目	スポーツビジネス特論	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	原田宗彦・小笠原悦子（2015）スポーツマネジメント（改訂版）. 大修館書店. 伊丹敬之, 加護野忠男（2003）. ゼミナール経営学入門（第3版）. 日本経済新聞出版社. 琴坂将広（2018）経営戦略原論. 東洋経済新報社. 入山章栄（2019）世界標準の経営理論. ダイヤモンド社. 武藤泰明（2014）スポーツの資金と財務. 大修館書店. 朝倉祐介（2018）ファイナンス思考. ダイヤモンド社.	
成績評価方法 と基準	スポーツマネジメントの市場環境に関するレポート（25 点） スポーツ組織のマネジメントに関するレポート（25 点） スポーツ組織が抱えるマネジメント課題解決プランに関するレポート（50 点） 全てのレポートを合わせて 100 点とし、60 点以上で合格とする	

□講義科目（専門科目）

科目名	スポーツ人類学特論	2単位
担当者	吉田文久	
テーマ	スポーツの人類学的研究の成果とその文化的・社会的貢献について	
科目のねらい	<キーワード> ① 人間 ② 多文化共生 ③ 文化的特性 ④ 行為主体 ⑤ フィールドワーク <内容の要約> 世界各地には、近代化しないままの形で様々な土着の伝統スポーツが存続し、その土地に根差す文化として、人々の生活と一体化し、そこには、人間が生きていく楽しみを創造する知恵が盛り込まれている。彼らが行為主体（Agent）として、その伝統スポーツを存続・継承する姿からは、現代におけるスポーツの主体者形成の問題はじめ、スポーツ現場で生じている課題を解決したり、地域の諸課題を解決するためのヒントを得ることができる。本科目では、スポーツ人類学のこれまでの研究成果及び研究方法を分析・検討し、自らがフィールドに出て調査し、記述する作業に取り組む。その作業をもとに、人間にとってのスポーツの意味、スポーツのもつ文化的価値について考察し、多文化共生の視点から主体性をもってスポーツの発展に寄与する行動について各自が提案する内容を集団で検討し、改めて自身の役割、社会貢献の仕方について確認することをねらいとする。 <学習目標> 1. 伝統スポーツがどのように伝承され、そのために、どのような工夫や努力がされてきたか民族誌を解説し、説明することができる。 2. スポーツ人類学研究の成果を批判的に分析し、自身が取り組む研究の目的・内容・方法について提示・説明することができる。 3. スポーツの行為主体形成の課題を理解し、その課題解決に向けて行動に移す方法を提示し、集団検討に基づいてフィードバックすることができる。 4. 多文化共生に向けてスポーツ人類学がどのように貢献できるか理解し、その具体的な行動方法を提示することができる。	
授業の進め方	第1回 スポーツ人類学研究の意義とその歴史 <学問論> 第2回 文化人類学との接点 <他分野との接点> 第3回 これまでのスポーツ人類学の研究テーマとその成果 <研究成果> 第4回 スポーツ人類学研究の成果に基づくスポーツの文化的特性（意義）とは（事例1） <日本の伝統スポーツ> 第5回 スポーツ人類学研究の成果に基づくスポーツの文化的特性（意義）とは（事例2） <世界の伝統スポーツ> 第6回 スポーツ人類学の研究方法としての文献研究 <史料発掘> 第7回 スポーツ人類学の研究方法としてのフィールドワークとは(1) <参与観察> 第8回 スポーツ人類学の研究方法としてのフィールドワークとは(2) <フィールドノート> 第9回 民族誌的記述方法とは <目的・内容・方法> 第10回 各自の設定した研究対象に関する調査(1) <事前打合せ（対象者理解）> 第11回 各自の設定した研究対象に関する調査(2) <インタビューの実施> 第12回 各自の設定した研究対象に関する調査(3) <インタビューの補足> 第13回 調査の整理 <整理> 第14回 研究成果の発表 <発表> 第15回 スポーツ人類学の研究成果の文化的・社会的貢献の可能性 <研究成果の貢献>	
事前学習の内容 学習上の注意	予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。 復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。 その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。	
本科目の 関連科目	スポーツ哲学特論、スポーツ史特論、スポーツフィールドスタディ演習A、スポーツフィールドスタディ演習B	
テキスト	『フットボールの原点』吉田文久著、創文企画、2014 『ノールール』吉田文久著、春風社、2022	

参考文献	『スポーツ人類学入門』、K.ブランチャード、A.チェスカ著：大林・寒川訳、大修館書店、1988 『スポーツ人類学』宇佐美隆憲著、明和出版、2004 『教養としてのスポーツ人類学』寒川恒夫（編著）、大修館書店、2004 『遊びの人類学』亀井伸孝著、昭和堂、2013
成績評価方法 と基準	プレゼンテーション 20%、課題レポート 30%、最終レポート 50%により総合評価し、60 点以上を合格とする。

□講義科目（専門科目）

科目名	保健体育科教育特論	2 単位
担当者	吉田文久、吉岡隆之	
テーマ	保健・体育授業の授業づくり及び授業研究の理論及び実践	
科目のねらい	<キーワード> ① 授業づくり ② 授業研究 ③ インクルーシブ体育 ④ PDCA サイクル ⑤ 教科の存立基盤 <内容の要約> 教育実習はじめ教育現場での授業実践を経験し、また参観してきたことをもとに、保健体育科教育関係の雑誌、学会発表や論文における体育実践の現状、研究成果や課題を整理し、現場に直結し、PDCA サイクルに基づく保健及び体育の授業づくりについて検討する。ここでは、異質協同、インクルーシブ体育を土台として、生徒の多様性に的確に対応できる体育教師の資質を身につけ、さらに、保健体育という教科の存立基盤を明らかにする議論を含める。 <学習目標> 1. 教育現場の保健及び体育実践の成果と課題を雑誌、論文を読み解き、説明することができる。 2. 教育現場における実践に直結する保健及び体育の授業づくり、授業研究の高度な専門的知識を身につけることができる。 3. 諸外国の取り組みを含め、保健及び体育実践におけるこれまでのインクルーシブ体育の実践の成果と課題について説明でき、これからの在り方を提示することができる。 4. 保健体育が教科として位置づく教科固有の価値について説明することができる。 5. 体育科教育、保健科教育及び安全教育の連携について理解し、説明することができる。	
授業の進め方	第1回 保健科教育及び安全教育に関する教材開発<担当: 吉岡> 第2回 アクティブラーニングを生かした保健科教育の実践<担当: 吉岡> 第3回 保健科教育の授業評価法Ⅰ<担当: 吉岡> 第4回 保健科教育の授業評価法Ⅱ<担当: 吉岡> 第5回 まとめ<担当: 吉岡> 第6回 体育実践の現状と課題Ⅰ（体育科教育関係の雑誌論文、実践報告に基づいて）<担当: 吉田> 第7回 体育実践の現状と課題Ⅱ（体育科教育関係の学会誌論文に基づいて）<担当: 吉田> 第8回 体育におけるカリキュラム論Ⅰ（日本の学習指導要領の変遷と改訂の意図）<担当: 吉田> 第9回 体育におけるカリキュラム論Ⅱ（イギリスのナショナル・カリキュラム）<担当: 吉田> 第10回 インクルーシブ体育の現状と課題Ⅰ（日本）<担当: 吉田> 第11回 インクルーシブ体育の現状と課題Ⅱ（海外）<担当: 吉田> 第12回 体育における教材づくり、教材開発研究の可能性と問題点<担当: 吉田> 第13回 体育におけるPDCA サイクルの理解と実践<担当: 吉田> 第14回 体育の教科としての存立の根拠の議論<担当: 吉田> 第15回 まとめ<担当: 吉田>	
事前学習の内容 学習上の注意	予習：該当する内容について、参考書などを熟読し、疑問点などを明確にして授業に臨むこと。 復習：授業内容を深めるとともに、不明確な内容については再度学習すること。 その他：授業には積極的な姿勢で参加すること。	
本科目の 関連科目	スポーツフィールドスタディ演習A	
テキスト	『中学校及び高等学校学習指導要領解説保健体育編』（平成29年、平成30年）	
参考文献	『体育科教育学への探求』（竹田、高橋、岡出編著）大修館書店、1997年 『体育科教育学の現在』（岡出、松田、近藤他編集）創文企画、2015年 『保健科教育法入門』（日本保健科教育学会）大修館書店、2017年 『学校保健実務必携』（学校保健・安全実務研究会）第一法規、2017年	

成績評価方法 と基準	プレゼンテーション 20%、課題レポート 30%、最終レポート 50%により総合評価し、60 点以上を合格とする。
---------------	---